

企画展特集

茶のうつわー堺環濠都市遺跡から出土した名品ー



堺環濠都市遺跡(SKT)では、47年前に調査が開始されて以降、これまでに1300地点を超える立会調査や発掘調査が行われてきました。発掘調査では、15世紀から17世紀初頭に自治都市・貿易都市として繁栄していた当時を物語る数多くの遺物が出土しています。

なかでも、武野紹鷗や千利休などの茶人が活躍した堺では、「茶の湯」に関連する陶磁器が多数発見されており、ポルトガル人宣教師により「数寄と呼ばれる新しい茶の湯が始まった」とされる堺の町を象徴するものとして注目されます。

本展では、利休没後の慶長年間(1596~1615)に堺の町衆が使用していた、いわゆる「織部様式」とされる茶陶約100点を展示いたします。産地や形の異なる多様な陶磁器を組み合わせて、独自の美意識や鑑賞眼で新たな茶の湯を創造した時代の空気を感じていただければ幸いです。

また実際の出土品に触れていただく「触れる茶陶ー桃山時代を体感しようー」と、来館者の皆さまに投票していただく「あなたの推しうつわ教えてください」My Favorite Vessel」を設けていますので、ふるってご体験・ご参加ください。

(堺市文化財課学芸員 相馬勇介)

上:志野茶碗(SKT218)
中:軟質施釉陶器茶碗(SKT428)、瀬戸美濃茶入(SKT344)、志野茶入蓋(SKT263)
下:懷石道具
堺市文化財課蔵

目次

- 1 | 企画展特集 | 茶のうつわ
ー堺環濠都市遺跡から出土した名品ー
 - 2 | 茶室対談 | 本田山豊光さん(陶芸家)×
相馬勇介(堺市文化財課学芸員)
 - 3 | 学芸茶話 | 学芸員ってどんな仕事をしているの?
～資料復元編
 - 4 | レポート | 企画展
館蔵の逸品ー利晶の杜の収蔵庫から
千家十職茶会
- |ちよっと一息| みて!みて!利晶のここ
露地

陶芸家。ホンダ陶芸主宰。堺陶芸会会員。1981年より父の豊山に師事し、作陶活動をはじめ。1988年、大阪府南河内郡早赤阪村に登り窯を開窯。2013年、堺の土をつかった茶陶「堺焼」の復興に携わり、以降堺焼の茶碗を制作。2015年、さかい利晶の杜に自ら制作した堺焼の茶碗を寄贈。2021年、企画展「みてさわって堺のやきもの」出品。



ほんだ やまとよみつ
本田山豊光(陶芸家)

茶室 対談

そうま ゆうすけ
相馬勇介(堺市文化財課学芸員)



堺市文化財課学芸員
企画展「茶のうつわ―堺環濠都市遺跡から出土した名品―」担当者

企画展「茶のうつわ―堺環濠都市遺跡から出土した名品―」に関連し、陶芸家と考古学専門の学芸員というそれぞれの立場で焼きものに接してこられたお二人に、「登場願ひ茶室「得知軒」」で対談を行いました。こちらの内容は対談をもとに加筆修正したものです。(敬称略)

相馬 今秋、中世から近世にかけて都市として繁栄した堺で育まれた茶の湯文化を紹介する企画展を開催します。堺環濠都市遺跡を発掘調査すると、おびただしい数の茶の湯に関係する遺物が出土します。出土品の多くは破片でそれらを接合し、石膏で補填などして本来の形に復元していきます。現在の町の地下には、慶長20(1615)年に大坂夏の陣によって堺のまちが火災にあつた当時の生活面が真空パックされている状態で残っています。そのため、焼けた土の中からは当時の茶人や商人が使っていた茶道具が出土します。昔も今も茶道具は大事にされていたようで、蔵などの遺構に納められた状態で発掘されています。今回は、その慶長20年に被災した花入や水指、懐石道具などの茶陶を約1000点展示します。堺で出土する茶道具の特徴は、国産のものから海外からもたらされたものでさまざまな名品が集まっており、多様な産地のもので構成されていることだと思います。

本田山 中国や朝鮮から渡ってきた弁鉢などが茶碗に見立てられて使われていたようですね。利休さん以降の時代ですが、もちろん利休さんの影響があつた時代の茶道具ということでしょうか。

相馬 はい、慶長20年には、利休は既に亡くなつており、利休の弟子であつた古田織部の時代になります。

本田山 良いものは残されて、お茶道具として使われていたということですね。現代の茶陶を創作されている方は、桃山時代の頃の茶陶を手本にされています。

相馬 桃山時代の茶陶が今でも良いものとされているのはなぜだと思いますか。

本田山 やはり形や色、茶の湯文化が育まれてきた時代にはじめて茶の湯専用に作られた器だからではないでしょうか。私たちも茶陶をつくる時は、本をみて大きき

などを参考にしています。(出品資料を見ながら)しかし、昔の器は大きいですね。武将たちが軍事会議をしながら茶を飲むような男の世界の器だったので大きかったんじゃないかと思います。しかし今はもちろん女性でお茶をされている方も大勢いらつしゃいますし、手に馴染む持ちやすい小ぶりなお茶碗が好まれる傾向があります。

相馬 本田山先生は陶芸教室を主宰されていますが、茶碗を作るとき生徒さんにはどのように教えていらつしゃいますか。

本田山 「中の形を作りなさい」と指導しています。初心者の方は飲み口が厚く、腰部分が薄い茶碗になつてしまふことが多々あります。外の形は後から削れるので、まずは茶が注がれる中の形から作るように助言しています。

相馬 先日展示会にお邪魔した時に、本田山先生が生けられた花と花入を拝見しました。普段は遺物として花のない状態で花入を見ているのですが、やはり花入は花があつてはじめて映えるのだと思いました。

本田山 花を生けると、さまざまな器を使いますが、花に合わせて器を選びます。花入が主張すると花が負けてしまいますね。

相馬 花入は今回の展示品の中でも、たくさん種類を展示する予定です。

●堺の土を使った「堺焼」について教えていただけますか。

本田山 7年前に受けた取材がきっかけで、堺の土を使った茶陶「堺焼」を立ち上げました。堺の書道家の永田峰亭先生に字を書いていただき判子を作り、印を押しています。堺には昔から焼きものがありますが、いまの「堺焼」を作つていくつことになつたんです。毎年10月には、さかい利晶の杜で公開しており、今年も展示します。堺の土でつくる「楽焼」と、堺の粘土を釉薬にした「伊羅保」の2種類の茶碗を作っています。現在は南区の大庭寺遺跡から出土した土をいだけ、茶碗作りの材料にしています。その前は中区の土塔周辺や南区のハーベストの丘辺りの粘土を使つていましたが、大庭寺の土が

一番良いですね。しかし、大庭寺の土だけでは、楽焼を焼く程度の低い温度では焼けますが、それ以上温度を上げると焼いたときに形が崩れてしまいます。そのため信楽の粘土を4割入れて焼いています。

相馬 東北丘陵の発掘調査をしていると、地盤を構成する土にはさまざまな種類があると感じます。人が住んでいた丘陵は石が多い強固な地盤で、一方で低い谷のような場所は粘りのある土であることが多いです。谷の底から見上げると(古墳時代から奈良時代に操業していた)須恵器の窯跡があり、陶器窯跡群では燃料や土の性質など焼きものをつくるための条件が整っていたのかなと思います。

本田山 陶器の窯などが残っていたら、備前や信楽のように、堺にも焼きものが残っていたのかなと想像します。私が拠点としている中区の深井は、戦前すべて田んぼだったので、その土をめぐり、粘土をいただいでいました。田んぼの下は良い土が多いですね。

相馬 深井周辺で粘土を採っていたのは何か理由があるのでしょうか。

本田山 親父の時代から窯があつたからですね。トロツコをひいてもらつてきていました。はじめは煙瓦を焼いて、その後は「飯茶碗を作つたり、ガラスを溶かす埴塙を焼いていました。ずっと焼きものに携わっていました。家でも趣味的に窯をつくつていましたね。そんな影響もあつて、手伝うようになりました。

相馬 実は深井周辺の堀上町遺跡や宮園遺跡などで行われた発掘調査では、鎌倉時代から江戸時代にかけての粘土採り穴が多く見つかつています。他の遺跡の調査では見かけることが少ないのに、深井のエリアにはかたまつて見つかつています。焼きものに使用するだけではないかとも思いますが、あの辺りでは良い粘土が採れたのかなと想像します。

学芸茶話

学芸員って
どんな仕事をしているの？

資料復元編

学芸員のさまざまな仕事内容について紹介するコーナーです。第2弾は、「資料復元」です。発掘調査でバラバラの状態で見つかった土器がどのようにして博物館に展示されるかをお話します。



田村唯史 堺市文化財課学芸員
企画展「茶のうつわ—堺環濠都市遺跡から出土した名品—」担当者

一般に、博物館や資料館などの展示や写真撮影に使われている土器などは完全な形をしています。よく見るとそれらは断片をもとに復元が施されている場合がほとんどです。

復元とは

発掘調査では、遺跡(昔の人たちが生活していたことがわかる跡がある場所)からさまざまな遺物(土器や石器などの昔の人が使った道具)が見つかりますが、そのほとんどがバラバラの破片の状態です。土器の研究者や見慣れた人なら破片から全体の形を想像することが可能ですが、来館者に広く展示のテーマについて理解してもらうためには、その遺物の本来あったであろう姿に戻す作業が必要になります。

復元作業

発掘調査で見つかったバラバラの土器片を整理し、同じ個体のものを接着剤で接合します。つぎにコンパスや定規など専用の道具を用いて、土器全体の形状や口径などを図面上で復元します。そして粘土等を板状にし、足りない部分の内側から形を整えてあげ、石膏に水を混ぜ生クリーム状にしたものを流し込んでいきます。石膏が凝固したら当て具を外し、小刀や彫刻刀などの道具を使用し、石膏を削ります。ここからが特に重要なのですが、削る際は残っている土器の形状や細部をよく観察し土器全体の特徴を考察したうえで、全体的に形が一体化するように本来あったであろう形に仕上げていきます。その後、残っている部分を参考に丁寧に彩色して作業は終了します。地道で丁寧な作業が求められます。

さかい利晶の杜の千利休茶の湯館で展示している陶磁器のほとんどは堺環濠都市遺跡から出土しており、それらは岐阜県や愛知県、岡山県、佐賀県など日本各地で作られたものです。また日本だけではなく、中国や

韓国、ベトナムなどで焼かれたものもあります。それぞれ材料の土や作り方、色調などが異なるため、復元を行うためにはそれらの土器を観察し、作り方などを学ぶ必要があります。復元作業はそれ自体が資料研究の一つといえます。

展示会場では、発掘や復元に携わった学芸員になったつもりで目の前の資料を詳細に観察してみてください。豊富な茶道具やその多様な生産地を通じて堺の茶の湯文化についての理解を深めていただければ幸いです。



■ 企画展「茶のうつわ—堺環濠都市遺跡から出土した名品—」
 [会 期] 令和4年9月17日(土)~10月16日(日)
 [休館日] 第3火曜日(9月20日)
 [会 場] さかい利晶の杜 企画展示室

[関連事業]

①学芸講座「堺環濠都市遺跡から出土した桃山茶陶」
 日時:9月25日(日) 14:00~15:30
 会場:さかい利晶の杜 講座室
 定員:30名(要事前申込、要観覧券)

②学芸員による展示解説
 日時:9月24日(土)、10月15日(土)
 各日 14:00~(約20分程度)
 会場:さかい利晶の杜 企画展示室
 申込:不要(要観覧券)

③現地見学会「埋もれた環濠都市遺跡を歩く」
 日時:10月1日(土) 10:00~12:00
 集合場所:堺市役所前広場 解散場所:さかい利晶の杜
 行程:堺市役所→大小路→菅原神社→開口神社→市之町西→甲斐町西→さかい利晶の杜
 定員:30名(要事前申込、応募者多数の場合は抽選)
 参加費:無料

*詳しくは電話(072-260-4386)またはメール(event@sakai-rishonomori.com)でお問い合わせください。
 *新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を徹底したうえで実施します。

レポート

企画展「館蔵の逸品―利晶の杜の収蔵庫から」
千家十職茶会

当館は中世から続く環濠都市堺の中心に位置する宿院の地に、環濠都市に生まれ育った千利休と与謝野晶子を顕彰するミュージアムとして建てられました。そのため当館の館蔵品は、与謝野晶子資料、茶道具や茶の湯に関する資料、堺の地域資料の3つの柱で構成されています。そのなかから、初公開資料を含む館蔵品をセレクションし紹介しました。



展示会場風景(令和4年5月14日～6月12日開催)

与謝野晶子のコーナーでは、晶子が生きた結核の際の仲人にお礼として贈った百首屏風や、夫・寛(鉄軒)の掛軸を展示しました。茶の湯のコーナーでは、平成30年度に堺ライオンズクラブから寄贈

いただいた「千家十職」による茶道具のほか、茶の湯に関する資料を展示しました。堺の地域資料のコーナーでは、堺生まれの肥下恒夫が発行人となった文芸雑誌『コギト』、堺の郷土史研究者である泉本五一による戦前の堺の町を記したノートを紹介しました。今回展示した資料の多くは、近年ご寄贈いただいたものです。また貴重な宝である館蔵品を未来に伝えるために保管する収蔵庫にも着目し、パネルで紹介しました。



「千家十職茶会」
協力:堺ライオンズクラブ

企画展に関連して、千家十職の茶道具を床で拝見し、お茶をいただく親子向けのイベントが開催されました。普段は展示ケース越しにしか見ることができない貴重な茶道具を間近で見ただく機会となりました。そしてお茶の先生のご指導のもと、楽しくお茶を点てることができました。

(千利休茶の湯館学芸員 三好帆南)

10月	11月	12月	1月	2月	3月
～10月16日(日) 茶のうつわー堺環濠都市遺跡から出土した名品ー	11月12日(土)～1月15日(日) 与謝野晶子の温泉紀行			3月4日(土)～3月18日(土) さかいアートパワー	
～10月17日(月) 堺市文化財(考古学)指定記念展示	10月19日(水)～1月16日(月) いきもの文様				
～12月19日(月) 千家十職の茶道具 一点前			12月21日(水)～ 千家十職の茶道具 一かざり		
～10月17日(月) 姉と第一晶子の想いー	10月19日(水)～11月14日(月) 『新新訳源氏物語』	11月16日(水)～12月19日(月) 百首屏風(鼓より)	12月21日(水)～2月20日(月) 堺の町と晶子		2月22日(水)～3月21日(火・祝) ひな人形
企画展示室	千利休茶の湯館	与謝野晶子記念館	※ 都合により、展示内容の一部が変更する可能性があります。		



施設担当者

みて！みて！利晶のここ 露地

当館の茶室「さかい待庵」と「無一庵」の間には、茶室研究者の中村利則先生(1946-2020)がつくられた露地(茶の湯の庭)があります。露地の苔の根はとても剥がれやすく、雑草の処理や松葉の掃除などで簡単に抜けてしまい、そのたびに根付き直るように思いを込めながら植え直しています。しっかり良好な状態を維持するためにも毎日の手入れが欠かせません。ミストを導入し、新しく苔(スナゴケ、ハイゴケ)を張り替え、少しずつメンテナンスを行なっています。しっかりと敷き詰まったスナゴケが水に濡れ柔らかく開いた状態になった時には、感動を禁じ得ません。みなさまに美しい苔庭を見ていただけるように、これからも気持ちを込めて手入れしていきます。 ※露地の一部は茶室の外から見学していただくことが可能です。



さかい利晶の杜の露地

編集後記

今年度よりWEB限定公開のニュースレター「学芸WEB通信 RISHO」をHPで公開しております。ぜひ本誌とあわせてご覧ください。
本号編集担当:三好帆南(千利休茶の湯館学芸員)

SAKAI RISHO NO MORI さかい利晶の杜
Sakai Plaza of Rikyu and Akiko

- 千利休茶の湯館
- 茶の湯体験施設
- 与謝野晶子記念館
- 観光案内展示室

開館時間

- 千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館・観光案内展示室・企画展示室
9:00～18:00
※千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館 入館は17:30まで
※企画展示室 企画展開催中のみ開室
- 茶の湯体験施設
10:00～17:00

休館日

- 千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館・茶の湯体験施設・企画展示室
第3火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始
- 観光案内展示室
年末年始

〒590-0958 大阪府堺市堺区宿院町西2丁1-1
TEL.072-260-4386 FAX.072-260-4725
https://www.sakai-rishonomori.com

